慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	楊絳「陳衡哲女史を偲ぶ」
Sub Title	Yang Jiang's essay, "Remembering Chen Hengzhe"
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.14 (2021.) ,p.185- 213
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	長堀祐造教授退休記念号 翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20210331-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳

楊絳「陳衡哲女史を偲ぶ」

櫻庭ゆみ子訳

はじめに

二〇一六年に一〇四歳で世を去った稀代のエッセイスト楊絳は、晩年に最愛の一人娘[1]を病で失い、その翌年に文学の導き手でもあり人生の伴侶でもあった夫銭鍾書[2]を亡くすという悲劇に見舞われるが、深い悲しみの中でも決して筆を止めることなく、エッセイを書き続けた。そうして書かれた作品の中に、中華人民共和国成立直前に知り合った陳衡哲[3]、任鴻雋[4]夫婦を哀惜の情を込めて追憶する一篇がある。

そこでは先の見えない状況下にあって大陸に残るか否かの選択を迫られる知識人たちの様相が、些細で具体的なエピソードとともに克明に描き出され、その後狂いを生じた制度に翻弄される彼らを文字の中で見事によみがえらせている。大切な人々が歴史の彼方に追いやられて忘却されぬよう記憶の再現が試みられていると言ってもよい。

人間が人間たる所以である記憶を消失させるのではなく、今日へとつながる時の流れに据え置いて伝えるべき真実を伝える。気の置けない仲であった存在への情の発露と同時に、常に起こりうる社会のゆがみを指摘し歴史の教訓とする批判精神が発揮されている見事な一篇である。

作家楊絳に最後まで付き添い世話役を務めた呉学昭女史の許可を得て、ここに紹介したいと思う。

尚、底本には『雑憶與雑写　一九九二―二〇一三』（生活・讀書・新知　三聯書店、二〇一五年四月）所収の「懐念陳衡哲」を使用した。

「陳衡哲女史を偲ぶ」

私が初めて陳衡哲女史にお会いしたのは一九四九年、儲安平さん[5]のお宅でだった。儲安平さんは任鴻雋、陳衡哲ご夫妻が上海に移ってこられることを知って、自宅に宴の席を設けて客を招き、ご夫妻を歓迎しようとされたのである。ただ儲さんはすでに離婚し、ホスト役の女性がいなかったため、あらかじめもてなし側として私を招き、女性客の相手を補佐してもらおうとしたわけだった。鍾書がすでに私に代わって承諾していた。

鍾書は当時中央図書館[6]の英文編集長を務めており、毎月必ず南京に仕事状況を報告することになっていた。儲安平さんが任、陳ご夫婦のために酒宴を設けたその日はあいにく南京に行かねばならず、夕食前に上海に戻ってくるのは無理だった。儲さんのお宅は共同租界にあり、私たちの住まい[7]はフランス租界だったので、遠いだけでなく交通の便も悪い。しかも私は社交が苦手で、一人でのお呼ばれは気が引けてならなかった。鍾書が出かける前に、「行きたくなくなったわ。行かなくてもいいかしら?」と相談を持ち掛けると、鍾書はちょっと考え「行くべきだ

ね」と答えた。鍾書が「行くべき」という時、私は大抵聞き入れることにしていた。それで覚悟を決め一人でお招きにあずかることにした。まず路面バスにもまれ、それから三輪車[8]に乗り換えて儲さん宅まで乗り付けた。

その晩の宴席は二つの大きなテーブルがしつらえてあり、多くの客が来ていた。大多数の顔は見覚えがあった。しかし私は社交辞令が言えず、見知らぬ人にはしり込みするし、名前も覚えられないので、誰がいたのかその名前を挙げることができない。王雲吾氏[9]がいらしたのは確かである。席上しばしば上海語で「私、雲吾が」と声を張り上げておられたから。それからもう一人、劉大傑氏[10]も。儲安平氏が陳衡哲女史に私を紹介した時、劉氏は「なんてこった、きょう銭鍾書が来られないなんて、惜しい惜しい。彼ら二人こそ本当の才子佳人なのに」と地団駄踏んで悔しがった。

私は「佳人」と称されるに値しないし、第一こんな言い草もないだろうと思った。ただ横で守ってくれる鍾書がいないからには自分で踏ん張るしかない。それでとっさに「陳先生は才子佳人を一身に備えていらっしゃいますね」と答えた。

陳衡哲女史は眼鏡の奥に美しい瞳をお持ちで、それはすぐ目についた。私の言葉を耳にしたとたん、彼女が、傍らに立った上品なすらりと背の高い男性と視線を交わしたので、その方が任先生に違いないとわかった。女史の眼の奥の笑いが任先生の口元に伝わったのが見え、内心少々慌てて自問した。「見当違いのことを言ってしまっただろうか？　この才子を無視する失礼をしでかしたか？　でも才子だって才子を娶ったっていいはず」。私は真っ赤になって任先生とも握手を交わしたのだった。

その日の女性客は全部で三人だった。一人は私、そして陳衡哲女史とほかにもう一方（ひとかた）が黄郛夫人[11]だった。お二人はあきらかに昔なじみのようである。皆が席に着くと、お二人は並んで私の向かい側の席に座り、私はドアと向き

合う席に座った。別のテーブルは部屋の奥にしつらえてあった。そのテーブルからは「私、雲吾は」という大きな声が頻繁に耳に届く。ホストと任先生はいずれもそちらのテーブルにおり、議論する声に混ざって時おり笑いがおこった。私たちのテーブルでは女性客のためか幾分ぎこちなかった。多分に私がもてなすことが不得手だったためだが、それでこちら側は向こう側ほどにぎやかではなく、大声でしゃべったり笑ったりする者もなく、せいぜい近くの人と小声で言葉を交わす程度だった。

私は陳衡哲女史が食べるふりをして、目の前の器を見つめながら、手に箸を持って、肘でそっと黄夫人をつついたのを目にした。小声でつぶやいているのだが、話をしている感じではない。一つの文字を発すると、少し間を置いてまた一つ文字が出てくる。二寸ほどの言葉を一尺まで引き延ばし、二音節ごとに間隔を一寸か二寸置く。まるで一つ一つの文字が独立しているかのように。私はつなげてみた。こう言っていた。「ねえ見て、彼女誰かに似ていない？」黄郛夫人は大きなテーブルの向こうから私に何度か目を走らせた。そしてあけっぴろげに「似てる！似てる！　そっくりよ！」と続けざまに声を上げた。私のことをあれこれ論じているのだ。そ知らぬふりをするしかなかった。ただ彼女たちの視線が時々私の視線とぶつかった時は、軽く微笑み返した。

宴会がお開きになってから、黄郛夫人がテーブルを回ってきて私の手を取りこう切り出した。「あなた、私の妹とそっくりなのよ！」私はどう答えていいのかわからず、かなり気づまりだった。すかさず黄郛人が続けた。「でもね、妹は私みたいんじゃ全くないの。とっても美人よ」。黄夫人はきちんとしているが鷹揚である。髪を引っ詰めにし化粧っ気は全くなかったが、品格があった。私は彼女にこう言われてますますきまりが悪くなった。美人でなくとも美人に似たところがあると思わせることはできる。似ているか否かも自分でどうのこうのできるものでもない。幸いに陳衡哲女史がすぐやってきて私を脇に引き寄せ、三人が寄り添うように座ったので、何はばかること

なく話すことができるようになった。もっともほとんどはお二人が質問して私は答えるだけだった。

中華人民共和国成立後に清華大学に移ると、張奚若夫人[12]がすぐに打ち解け、私が彼女の親友ととても良く似ている、外見も話し方も似ていて、性格も似ている、と話してくださった。彼女と懇意になってからその親友について尋ねたところ、それは黄郛夫人の妹で、夭逝した才女だったという。黄郛夫人が親しく私の手を取ったのは、亡き妹の面影を見てのことだったのだ。『紅楼夢』の「五児が勘違いの愛を受ける[13]」である。

黄郛夫人は、私を家まで送るから、と言ってくださった。彼女は黒の真新しいセダンに乗っていた——当時乗用車に乗ってくる客は少なかった。陳衡哲女史も、送るから、とおっしゃる。任鴻雋先生が住所を調べると、任先生の車に送ってもらうのが道なりで都合がいいことが分かった。それで私はその緑の中古車で家まで送っていただいた。黄郛夫人は一度私を家に迎え入れてくださった。彼女が住んでいたのは庭付きの洋館である。屋敷の正面は壁一面に白いバラが咲き誇っていた。彼女は私に露のついた白薔薇を両手いっぱい贈ってくださった。これからすると、私が初めて陳衡哲先生にお会いしたのはバラが咲き誇る春のことだったに違いない。

抗日戦争が勝利に終わり、鍾書は中央図書館に正式の職を得、さらに上海暨南大学[14]で教授兼「英国文化叢書[15]」の編集委員に就任した。鍾書は「英国文化叢書」の一冊として任鴻雋先生にご専門分野の小冊子を翻訳していただこうと、任先生のご自宅に直接訪問することにした。私も鍾書と一緒に行き、車で送ってもらったお礼を述べた。二日後ご夫婦がそろって私たちの家を訪問してくださった。私たちの住まいは当時蒲石路蒲園[16]にあり、近くに有名な点心の店があった。そこの鶏肉の包子は特に人気があった。皮がふんわりして肉汁がたっぷりあり、餡もきめ細かくほどよい味付けだった。私たちはお手伝いさんにもてなし用に買って来てもらった。任先生は大変ご満悦だった。その後まもなく陳先生が私たちをお茶に招いてくださった。

二人は貝当路にある貝当アパートメント[17]に住んでおられた。互いの家はそれほど離れておらず、交通の便がとりわけ良かった。うちの戸口を出て少し歩いたところに路面バスの停留場がある。路面バスは混まない。バス停を三か所ほど経て下車し、それから少し歩くと先方についた。私たちは厚手のタオルを二枚持参し、点心舗で蒸籠（せいろう）から出たての鶏肉包子を買い、それを二重にしたタオルで包みあちらのお宅まで運ぶと、包子はまだ冷めず、熱々だった。任先生は鶏肉包子を相変わらず賞賛してやまなかった。

当時、私たちの娘はすでに病が癒えて学校に通っていたし、家にはお手伝いさんがいた。私は震旦女子文理学院[18]で、二、三科目を担当しており、日々の暮らしはぐんと楽になっていた。しかし、それまでの数年間は疲労困憊だった。非常勤講師をいくつかこなし、授業のほかに家庭教師をし、残りの時間を執筆業にあて、そのうえ台所のはしため役も担当。疲労が病を引き起こし、毎日三時か四時になると微熱が出て、体重も毎月のように一ポンドずつ減っていった。疲れて仕方がなかったが、医者は原因を特定できなかった。私は生来じっとしていられないたちで、暇な時でも本を見ながらセーターを編む。両手が自動化した機械の如く動く。けれども微熱が毎日続いてぐったりし、読書も編み物もする気がしなかった。父がすでに逝き[19]、以前のようにしょっちゅう父のもとで姉や妹たちと談笑することももうかなわなかった。鍾書は仕事で忙しく、暇があれば読書に勤しんでいた。ちょうど『宋詩紀事』[20]を読んでいて、よく近くの合衆図書館[21]にも調べに行っていたので、私は邪魔をしたくなかった。

折よく、任鴻雋先生も陳衡哲女史より忙しくされていた、陳衡哲女史のほうはちょうどトインビー[3]の西洋史四巻本をひもとき、第三巻目の後半まで読み進まれていたが、視力が衰えているため、毎日四時半に目を休めるための休憩をとられた。それでよく私たちをお茶に招いてくださった。（「Teaを飲みに」と称されるのだが、実際はいつもコーヒーだった）淹れていただくコーヒーは濃厚で香りがあり、私にはとてもおいしく感じられた。鍾書と私は

途中ついでに蒸籠から出たての鶏肉包子を一蒸籠分買い求め、タオルにくるんで持って行った。任先生はいつもとても愛でられた。鍾書は任先生と馬が合い、私は陳衡哲女史と馬が合った。何回か「Tea」をごちそうになってから、鍾書が一人で訪問してみたらと励ますので、私も喜んで伺うことにした。というのも任先生は仕事を中断してもてなしてくださるのであり、鍾書もまた仕事を置いて私に付き合ってくれているのが分かったからだ。私と陳衡哲女史と言えば、「Tea」で顔を合わせるほかにも、手紙でも電話でもやり取りをした。一人で伺うときに任先生がご在宅ならば、先生のために鶏肉包子を携えていった。でも先生のお仕事を邪魔することはなかった。ご夫妻の応接間はそれなりの広さがあり、東側半分が任先生が仕事をなさる場所で、西側は寝室につながっていた。私は陳衡哲女史とよく客間の西側の寝室側の近くでおしゃべりをした。

任先生へのお土産には鶏肉包子の持参が習慣となった。鍾書はよく「一騎の紅塵妃子笑う[22]」と冷やかした。任先生は鶏肉包子を召しあがるうちにますます魅入られ、やみつきとなったのである。私と陳衡哲女史のほうは鶏肉包子にはそれほど惹かれなかった。

陳衡哲女史を、私は面と向かっては陳先生と呼び、手紙では莎菲先生、我が家では陳衡哲と呼んでいた。彼女は私に「二姐」と呼ばせたがった。弟さんの陳益（謙受）が私の幼馴染みの蔣恩鈿[23]と結婚していたからだ。けれども陳益は私を年上格とみなしていた。彼の一番上の姉の長男の嫁を私が五姑と呼んでいたからである。（胡適『四十自述』[24]で言及されている楊志洵先生[25]のことを私は景叔公と呼んでいた。五姑は叔公の娘だった）。当時陳衡哲女史の年齢を私は知らなかったのだが、年長者のはずだとは思っていた。近頃彼女に関する伝記を読んで知ったのだが、私より二十歳も年上だった。そんなに年が上だとは少しも感じなかったし、彼女にも偉そうなそぶりは全くなかった。私たちはとても馬が合い何でも話した。女史は私と一緒の時に若返られたのかもしれない。私が接したのは

若々しい陳衡哲だった。

話が彼女と同輩の女子留学生に及んだ時は、ただ「私たちはチャンスに恵まれただけよ。あの当時高等教育を受けた女子学生は本当に少なかったからね」とおっしゃるだけだった。私は「五児」が間違って愛される、というわけでもなく、親族間の年上年下といった関係でもなく、ふいに出会った友人のような感じだった。

女史は以前私に『小雨点』[26]を送ってくれたことがあった。私は彼女の幾首かの旧詩のほうをさらに気に入っていて、前に読んだ時に、彼女を聡明でかわいらしいと感じたものだ。以前胡適に宛てた手紙の中の言葉、「你不先生我，我不先生你：你若先生我，我必先生你（あなたが私を先生と言わぬなら、私も貴方を先生と言わない。もし先生と言うなら私も絶対に先生と言わなくちゃ）[27]」これも気に入っている。とてもセンスがいい。私は身の程知らずにも自分の二冊の戯曲[28]をお渡しして批評を仰いだ。彼女は読んだ後に、「鏡を見て書いたものではないわね」とおっしゃった。二冊はずっと彼女の化粧台の上に置かれることになった。

私はご夫婦の常連で、お二人は私を客とはみなさなかった。ある時、お宅に伺うと、二人がちょうど喧嘩の最中だった。陳先生がその痩せて小さな体を張って「大」の字を作っている。両足を広げてふんばり、両手は左右に目いっぱい広げて寝室のドアをふさぎ、任先生を入らせないようにしていた。任先生は背を丸めて「虎が伏せる」格好で、脇から突破しようと試みるが成功しない。陳先生は勝ちをおさめてご満悦、茶目っ気たっぷりに笑った。負けを喫した任先生もひたすら笑っていた。私も一緒になって笑った。二人は私がいることを全く気にしなかったし、私もきまり悪さを感じることなどなかった。

よく自慢気に「私の友人の某某は」という人物が、私と鍾書に「昨晩陳衡哲家で夕食を取り夜更けまで語り合って、それで彼らの客間のソファーで一晩寝てしまったよ」と語ったことがある。それで翌日陳衡哲女史に会った時

に確認してみた。すると陳女史は「うちのこのソファーを御覧なさいな、あの人が眠れると思う?」と答えたのだ。もちろんその晩誰も夕食には招かれていない。彼女はこの話を任先生に話し、二人で笑っていた。私も大いに見識を積んだのだった。

そのころ陳衡哲家には男の使用人が一人いて、陳女史は「われらが労働者」と呼んでいた。この「労働者」は女主人にとってあまり用をなさなかったようだ。必要な時にしばしば家にいなかったからだ。彼女がお茶や食事に誰かを呼ぶ時はよく「少し早く来て手伝ってちょうだい」と私を誘った。ある時などは真剣な顔で早めに来るようにと頼まれた。ところが私の任務は、魔法瓶三つを床からテーブルに持ち上げることだった。魔法瓶も五ポンドの水が入る大型のものではなく、三ポンド用の中型に過ぎなかった。私ものちに老いてからようやく高齢者の腕力の弱さを悟った。中型の魔法瓶でも両手で抱え持たねばならないのだ。陳衡哲女史は身体が弱く、両手でも支えられなかったのである。

次第に周囲に私と陳衡哲女史の友情が知れるようになった。当時上海には婦女会があり、会員はすべて大学卒業生だった。婦女会は陳衡哲女史に西洋史の講演を頼もうとし、会長がわざわざ私に講演のお願いをしてくれと頼みに来た。陳先生は私のメンツをつぶさぬように婦女会に出向いて講演会を一度行ってくれた。会場入り口にはトインビーの著書も陳列してあった。

その年胡適氏が上海に来た時、本人がまだ到着する前から任家の客間には胡適の最近の写真が掲げられた。写真は大きく引き伸ばされてガラスをはめ込んだ額縁に収められ、胡適という二文字の横には一本の赤い線（名前の符号）が縦に引かれていた。陳衡哲女史は私に「全く遠慮会釈なく電話をかけてきて、胡適が着いたかどうかを聞くのよ」と三分の怒りを込めて私に言った。尋ねた者は確かに少々ぶしつけではある。ただ私には彼女の心情が理解

できた。「其の実とてもうれしい也」とは言わなかったが。そう言ったならば、あまりに単純化が過ぎた。

胡適『哲学史大綱』[29]は高校と大学[30]の時教科書として使ったので、もちろん「胡適」のご高名は耳にしていた。それに氏は、父と我が家の親しい友人とよく知った間柄でもあった。以前一人の女性が夫から虐待を受けているということが話題になったことがあった。その夫は蘇州でも著名な人物で、女癖が悪かった。胡適はこの女性の境遇を知って不公平だと大いに憤り、「離婚だ！　魅力があるうちに別のいい人を探すんだ」と言ったのだ。父はこの言を子どもじみているとした。その女性を私も何度か見かけたことがあるが、「魅力がある」とは言い難く、すでにふくよかになりすぎた中年女性だった。「魅力があるうちに」は父がよく引き合いに出して冗談の種にしたものだった。私はこの言葉を言った胡適氏を見てみたくてたまらなかった。

ある時、我が家の門番がロバ四頭を雇うように命じられた。胡適氏が蘇州にきて父を表敬訪問したいということなのだが、我が家の二人の叔母[31]ともう一方「北伐」に参加した女校長[32]が胡適氏と一緒にロバで蘇州の城壁周遊する約束したというのだ。ロバで蘇州の城壁をめぐるのは確かに面白かった。私は徒歩で城壁を一巡りしたことが幾度となくある。城壁内外は城河が流れている。内側のほうは川幅が狭く、外側のほうは広い。古風な城壁の上を歩き、城壁内外の全く異なる景色を愛でるのはとても面白い。徒歩で一周するのは足腰が強くなくてはならない。小型のロバにまたがって駆け足で城壁の上を一周めぐるのはわくわくする体験に違いなかった。

ただ蘇州は保守的な町である。我が家から胥門の城壁までしばらく通りを歩かなくてはならない。通りでは男性でもロバには乗らない。もし女性がロバにまたがっているのを目にしたら、通行人が大騒ぎするだろう。我が叔母たちと「北伐」女史は進歩的である。ただし、この三人の進歩的な女性と並んで蘇州の街並みをロバに乗って進む男性は一層目立つこと間違いなしだった。私は、この胡適先生は遊び心があって、こだわりがなく、かつ気概にあ

ふれ通行人にあざ笑われるのをものともしない人なのだと思った。

我が家の門番はあらかじめ四頭のロバを雇い、早朝に四人のロバ引きが柏樹（コノテガシワ）の植わった中庭で待っていた。二人の叔母と二人の客人はそこでロバに乗って出発するのである。父は客に会った後、庭で見送ることになっていた。

私は見に出たくてたまらなかった。しかし従来父の客に私たちが会うことはない。見に出てゆくのは憚（はばか）られた。叔母と客たちがすでに門から出発し父も部屋に戻ったところでようやく「深窓」から出てキョロキョロ見渡すと、我が家の正門と二つの中庭の門はまだ開けっ広げのままである。胡適先生がロバに乗っている姿は本当に見たかった。けれども集まって遊びに出かけた人々が一緒に戻ってくるとは限らない。通行人が驚愕したという話は門番が語ったか、あるいは二人の叔母が帰宅後に語ったかしたものだろう。

胡適氏の写真が納まった大きなガラス付き額は任家の客間のベランダに近い壁に掛けられた。それからまもなく鍾書が私に「胡適氏に会ったよ」と言った。鍾書はよく、合衆図書館に調べ物をしに行っていた。胡適氏は幾箱もの書籍を合衆図書館の二階に保管してもらっており、氏もよくこの図書館に通っていた。鍾書が胡適氏とまみえたのは、おそらく図書館長の顧廷龍氏（起潛）[33]が紹介したのだろう。胡適氏は鍾書に「君は旧詩を作るそうだけど、僕も作るよ」と言いながら、白い小さな紙片に鉛筆で近作を書きつけ、「墨と筆で書いてあげてもいいよ」とも言ったという。私はその詩のおしまいの二句、「几支無用筆，半打有心人（何本かの無用な筆、半ダースの心ある人々）」とだけしか覚えていない。私は表紙が紫檀の宣紙の冊子を一冊持っており、何人かの詩人から毛筆で詩を書いていただいていた。私だったら胡適氏にこういった毛筆の詩を書いてもらいたいとは思わない。おそらく、この胡適先生は率直な方なのだろう。相手が自分の書を欲しがらないかもしれない等とは思わないのだ。ただ、氏が書いた小さな紙片はずっと保管していて、「文化大革命」の時にようやく羅家倫氏[34]が鍾書に贈った八枚の太っちょ

の字と一緒に処分したのだった。

陳衡哲女史は「適之もあなたの脚本を読んでね、『鏡を見て書いたものではない』と言ってたわ。あなたに会いたいって」と仰った。

「鏡を見て書いた」というのがどういう意味なのか分からないし、何を指しているのかも分からなかったが、尋ねなかった。胡適氏が私に会いたいと言ったというのはとてもうれしかった。本当に会ってみたかったからである。

陳衡哲女史が提案された。「こうしましょう。我が家で内輪のTeaをやりましょう。あなた方お二人と私たち夫婦、それから適之とで」。こうして陳女史と私は手はずを整えた。

私と鍾書はいつものように蒸したての鶏肉包子を持って任家に赴いた。包子は一度にたくさんは買えない。いつでも大勢が蒸籠から出てくるのを待っているからである。たくさん買うためには、次の蒸籠を待たねばならなかった。私たちが任家に着いた時、胡適氏はすでに到着していた。鍾書とはすでに面識があったので、陳衡哲女史は私を紹介し、ついでに「今日は飛び入りのお客があるのよ。林同済さん[35]とex-wife（前の妻）。適之が来るって聞いて会いに来るっていうのよ。少し遅れて来て、挨拶だけして帰るわ」と教えてくれた。

誰が言い出したのか、鶏肉包子がまだ熱いうちに食べようということになった。陳衡哲女史と私は胃が弱く、食も細かった。私が持参した包子は大した量ではなく、私も陳女史も食指が動かない。覚えているのは、殿方三人が客間の東南隅に置かれた紫檀に半円形の大理石を乗せたテーブルの傍らに立っていた姿だ。壁に寄りかかったり、窓に寄りかかったりなどして、立ったまま鶏肉包子をほおばりながら談笑していた。陳衡哲女史は客間のこちら側で彼らのためにゆったりとコーヒーを淹れ、私は横で手助けをしていた。鶏肉包子を食べ終わった皆がコーヒーを飲みにやって来た。この時に胡適氏が私の叔父や叔母と面識があり、「お父上は私の先生ですよ」云々と言ったの

である。

林同済氏は以前に離婚した外国人の夫人を伴っていただけでなく、離婚した夫人の女友達（二十数歳のアメリカ人の女の子）と一緒に現れた。そこで皆は言葉を英語に切り替えた。胡適氏が、ちょうどいま恐妻家の物語を集めているところだと言った。日本とドイツだけはこの手の話がなく、「恐妻家の話があるというのは、女性の権力は実際は男性に劣らないことを示しているんだ」と語った。こう述べたのが林同済氏らの客がいる時だったか、それとも客たちが立ち去ってからだったかはっきり覚えていない。思い出すのを手伝ってくれる鍾書がいないからには、答えを出さずにこのままにしておこう。同席の客たちはコーヒーを飲み、形ばかりに点心を食べ、しばし話をした後去っていった。

三人の客が去った後、残った主人と客は、椅子をソファーの近くに引き寄せ丸くなって座り、ゆったりくつろいで、日常の些事から、チトー[36]やソ連のこと、知識人の前途等、それこそ忌憚なく自由に話した。

ごく最近の事でいえば、胡適氏は私信を焼却処分したことをひどく悔しがっていた。特にその中の一通では「あなたの学生×××[37]」と書かれていたとのことだった。「この手紙を焼いたのは惜しいなんてもんじゃない」と氏は言っていた。

当時五人は三つの家族を代表していた。我が家は国内に残り出国しないと決めていた。任、陳のお二人は出国しない方向に傾いていたが、胡適氏は残るのは都合が悪かった。私たちは任、陳ご夫婦と親密で、お二人は胡適氏とも親密な旧友の間柄だった。だからこの局面についてことさら口に出して説明するまでもなかった。当時、ソ連の鉄のカーテンの後ろの状況を反映した英語の小説を私たちは大方読んでいた[38]。知識人が今後どのような運命に直面するのかが私たちの最大の関心事だった。私たちはいずれも新局面に直面する知識人だった。皆は寄り添って語り

合った。真剣だったし、また親密でもあった。まるで内緒話をしているようだった。

その日、胡適氏は夜の宴会に出なければならず、もてなし側が自動車を迎えによこした。胡適氏は慌ただしく立ち上がり暇(いとま)を告げた。私たちも皆立ち上がって氏を送る。任先生と鍾書が戸口まで付き添い、陳衡哲女史は立ち上がったが再びソファーに腰かけた。それで私も一緒に座っていた。胡適氏は、片手に帽子を取り、ドア近くまで行ったところでもう一度戻ると、点心が盛ってある皿が並んだテーブルに近づき、悪戯っぽく指で芝麻焼餅をチョンとつつき、本場の上海語で「『蟹殻黄』まで持ち出してくるとはねえ」と言い、そのあとさっとドアから出ていった。任先生と鍾書がドアの外（ドアの外は階段である）まで見送った。陳女史は少々むっとして、「適之はspoilt（甘やかす）されてるわ。『蟹殻黄』ももう食べられやしない」と私に言った。

私は笑っただけで何も言わなかった。「蟹殻黄」はサクサクして香ばしく、朝食としては申し分ない。けれどもお茶菓子には確かにふさわしくなかった。こんな大きな芝麻焼餅を誰が食べるだろうか。というわけで、その皿の焼餅は誰も手を付けないままそっくり残っていたのだ。でも私には胡適氏がわざと彼女を怒らせようとやったように思える。

鍾書が任先生に付き添ってお客を送って戻ってくると、私も二枚の布巾をたたみ鍾書と一緒に帰途についた。帰宅してから「胡適さんは本当に交際上手だわ。一瞬で私の叔父や叔母の名を並べ立てるなんて。『あなたの学生』と人に呼ばれるのを気にしてるのね、だから、私の父の学生だと自分で仰ったわけか。でもわたしはお父様が、胡適は私の学生だというのを聞いたことがないけど」と鍾書に言った。鍾書は胡適氏に代わって説明してくれた。氏は私のことを顧廷龍先生に訊ね、顧先生が「名士の父の娘、すなわち老圃先生[39]のお嬢さんで銭鍾書の夫人である」と教えたのだと。私は、あらかじめ下調べをするのもまた社交家の社交術だと思った。でも鍾書は、私のためにし

ばし考証してから、胡適氏はみだりに誰かを「先生」とはしないだろう、でも私の父が「私の学生である胡適」とは絶対に言わないだろうと言ったのだった。

長らく胡適という著名なその名を耳にし、時に家族の間で話題にものぼり、そしてかつて我が家にも来たことがあったので、私は氏にとても会ってみたかった。だから今回の茶話会でお会いしたことは強く印象に残っている。胡適氏のほうは、多くの人と会っているから、私たち二人を覚えているとは限らない。親友や旧友の家でのあいった「他人に口外すべからず」[40]の談話の席では、胡適氏は発言が最も多かった。私たちは会話に加わったものの、口数は少なく、多くは聞く側だったので、胡適氏に忘れられない印象を与えたはずはなかった。その後、鍾書は胡適氏の送別会にも参加した。列席者には鄭振鐸氏[41]がおり、客はかなりの数にのぼったので、同席者を一人一人覚えるのは難しい。唐徳鋼氏[42]の記録によると、胡適氏が（後に）銭鍾書の『宋詩選註』[43]を評した際「その人（銭鍾書）には会ったことがない」と言ったということである。これは「身分が高くなると忘れっぽくなる」ことなのかもしれない。けれども胡適氏は同時に「大陸ではちょうどあの人（銭鍾書）を『処断』したところだ」とも語ったという。この言葉から、私は胡適氏は決して忘れていなかったのではないかと思う。自分は岸を隔てているから罵られても無視すればいい、けれども大陸にいて「処断」されるというのは、氏が私たちと「Tea」を共にしたあの晩の理解に照らせば、とても厳しい状況だということである。氏が「その人に会ったことがない」と言われたのは、わざとではないかと思う。実際のところ、私たちは批判され叩かれたものの、「処断」されてはいなかったのだが。

ある時、任先生が晩に宴会に呼ばれて陳先生が億劫がって行かなかったことがあった。彼女は、家での「普段の手軽な食事」に私を誘った。私たち二人だけである。私は伺った。たぶん私だけが彼女の「手軽な食事」に招いてもらえるのだと思うが、本当に「手軽」なのである。二人とも小食だったからだ。私は小ぶりの茶碗に半椀ほどし

かご飯を盛らない。おかずの量も少ない。私たち二人は食べる量も少なく、速度も遅い。けれども話は盛りだくさんだ。何をしゃべったのか今では思い出せないが、あることについて、彼女は話そうとしてやめ、また我慢できずに話そうとした。秘密を守れる？　と聞いてきた。守れます、と答えると、ちょっと考えてから、笑って仰った。「鍾書にも言っちゃだめよ、いい？」私はちょっと考えてから、「はい」と答えた。それで彼女はあることを告げた。帰宅すると鍾書がちょうど待っていた。「陳衡哲女史が今晩あることを教えてくれたんだけど、貴方にもしゃべっちゃいけないって。約束したわ」鍾書は、そうだね、と言って一言も聞かなかった。秘密なので、私は心の奥底にしまい込んだ。多くの年月が経ち、そのまましまい込んで忘れてしまった。覚えているのは、彼女が私と一緒に食事をして秘密の話をし、笑いあったあの情景だけである。

一九四九年の八月、鍾書と私は清華大学からの招聘の通知を受け取った。空気が変われば体の調子もよくなるかもしれない、と鍾書は言った[44]。私たちは八月の末に上海を発った。最後に陳衡哲家で参加した夜のパーティーでは、丸テーブルいっぱいの客がいたことを覚えている。血圧を測る必要があったので、陳女史は医者に血圧測定器を持ってきてもらうようにお願いしていた。ただ医者は忙しいので、客がすべて帰るのを待ってはいられない。女史のほうでは客の前で血圧を測るのは憚られる、それで私が血圧測定が必要だということにして、特別に医者に来てもらう。そして私が測る時についでに陳女史も測ってもらうということにした。私たちはこのように手筈を整えた。その晩は鍾書も一緒にパーティーに臨んだ

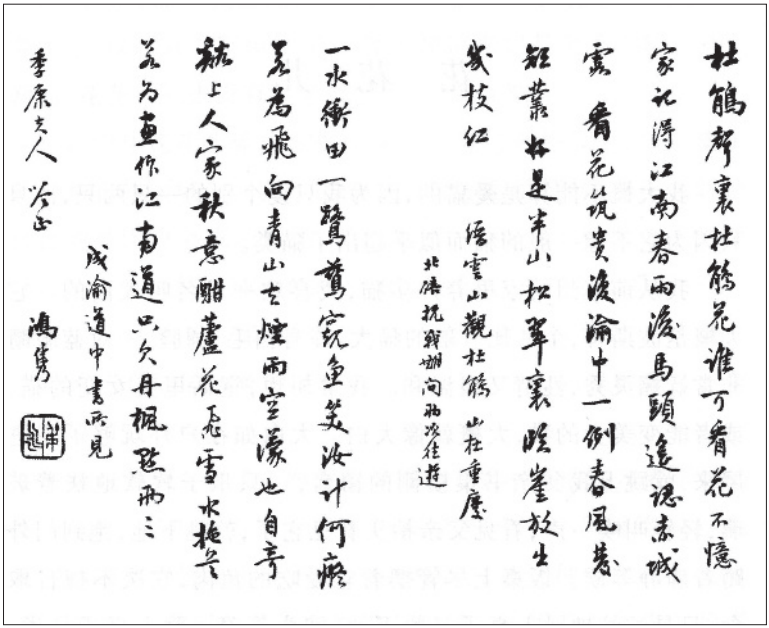
陳先生の血圧は正常であったが、私の血圧が予想外に高かった。陳先生は私に、菜食を採ること、でも完全な菜食主義になる必要はないのよ、と何度も言い含めた。そして笑いながら私と鍾書に菜食主義についてのエピソードを話してくれた。菜食を提唱する李石曾[45]が若い奥さんにも菜食を強いたところが、若奥様は口が寂しくてたまらず[46]、

仕方がないのでこっそり他の家まで行って肉料理を食べたという。李石曽氏は圃園に住んでいたが、そこは我が家のすぐ隣である。解放軍が河を渡ってくる前に彼ら一家は引っ越していき、解放軍がそこに進駐した。

私たちが清華に着いた後、私は陳衡哲女史としょっちゅう手紙のやり取りをしていたが、思うままには書くことができなかった。「三反運動」（当時「入浴」といった）[47]の後は、さらに規制が強まり、ペンをとってもどう書いていいかわからず、言葉が死んでしまったように感じた。私は偽れなかったし、いい加減に取り繕うこともできなかった。彼女に何が言えただろうか。私はかなり無理して彼女とやり取りを続けた。

引き続いて、三校の合併があり[48]私たちは清華大学から新北京大学の中関園の小さな平屋に引っ越した。鍾書は当時、市内に出向して毛沢東選集の翻訳作業に当たっていた。ある日任鴻雋先生と竺可楨先生[49]が銭鍾書を尋ねてきた。鍾書は出向先にいた。私は以前よく任先生のお宅に伺ったものの、先生には鶏肉包子を持っていっただけで、話をするのは陳衡哲女史とだけだった。著名人や学者の方と話をするのは苦手だった。その日、私は正真正銘の主婦の役割を務め、お茶を差し上げてお相伴に座り、二言三言言葉を交わすと何も言うことがなくなってしまった。鍾書は待っても戻りようがないので、お二人はほどなくして暇を告げられた。私は終始申し訳ない思いでいっぱいだった。これが任先生とお会いする最後となってしまった。先生は一九六一年に亡くなられたのである。私に残されたのは私へのお褒めの言葉としての任先生の毛筆の書だった。ご子息の同意をいただいてコピーを取りこの文の末尾に添えてある。任先生の詩集が早く世に出ることを願って。[50]

一九六二年八月、我が家は乾面胡同に新しくたった宿舎に移った。夏鼐先生[51]と私たちは同じ棟の同じ階段だった。一、二年過ぎてからだったと思うが、夏鼐先生が上海に出張に行かれて戻ると、陳衡哲先生からの託（ことづけ）を預かっていると仰った。それは、私からの最後の手紙に返信できていないのだが、近ごろほぼ失明状態にあるため手紙が書



任鴻雋の送った詩二首の画像

けなくなり、それで娘に代筆させるしかない、というものだった。ご夫婦の親孝行なお嬢さん、任以書女史がわざわざ米国から戻って両親の世話をしていることは知っていた。私はその後、陳衡哲女史と一、二度手紙のやり取りをした。「文化大革命」が来ると、私は女史と音信不通になってしまった。私たちが「流浪の民」であった[52]一九七六年一月に、新聞で陳衡哲女史の訃報を知った。

私が陳衡哲女史と頻繁にお会いしていた日々は決して長いものではない。ほんの数か月、半年にも満たない。なぜ私たちの間で、大変な時期の手紙のやり取りがこんなに長年続いたのか。それは私が彼女のことをとても好いていたし、彼女も私を好いていたからで、私たちの間には確かに、忘れがたい友情があったのだ。今でも私は彼女のことが忘れられない。

二〇〇二年三月二十日　定稿

原注

［1］陳衡哲（一八九〇―一九七六）、我が国新文化運動における最初の女性学者、作家、詩人、散文家。文のスタイルは恬淡として時に鋭く厳粛な風格がある。

［2］任鴻雋（一八八六―一九六一）、字は叔永、中国近代科学事業の提唱者であり、各面で組織化を行い、中国科学社の創立者の一人として長きに亘り指導的役割を担った。晩年は上海図書館館長を務める。

［3］トインビー（一八八九―一九七五）、英国歴史学者、ロンドン大学教授。十二巻の大著『歴史研究』を著す。

訳注

（1）銭瑗（一九三七―一九九七）銭鍾書・楊絳夫婦の一人娘。夫婦が英仏留学中に英国で生まれる。北京師範大学英文系教授。脊髄癌にて亡くなる。娘について楊絳の回想録『我们仨』（三聯書店、二〇〇三：邦訳『別れの儀式』勉誠出版、二〇一三）でその人となりが生き生きと描かれている。

（2）銭鍾書（一九一〇―一九九八）江蘇省無錫出身。作家、文学研究者。一九三三年清華大学外文系卒業後、上海光華大学（華東師範大学前身）で教鞭をとったのち一九三三年、義和団事変賠償金奨学金を獲得、楊絳と結婚後に夫婦で英国オックスフォード、パリ、ソルボンヌに留学、一九三八年帰国後、昆明の西南連合大学に赴任。翌年、父、銭基博の命で父の世話役を兼ねて一九四一年まで湖南省藍田国立師範大学英文系主任として教鞭をとる。この間の経験をもとに長編小説『囲城』が書かれる。一九四一年上海に戻り、震旦女子文理学院、上海暨南大学などで教え、南京中央図書館英文館刊『書林季刊』の編集を兼任。中華人民共和国成立以降、家族ともども北京に移り清華大学教授となる。大学改組の後は科学院所属となり、一九五〇年より『毛沢東選集』英訳委員会委員として翻訳作業に従事。文化大革命が始まると中国科学院の他の教授たちとともに河南省の幹部学校で労働に従事。楊絳も後に加わる。一九七二年に夫妻で北京に戻る。学術著作に『談芸録』、『宋詩選注』、『管錐編』等。

（3）陳衡哲（一八九〇―一九七六）湖南省衡山人、江蘇省武進県生まれ。筆名莎菲、英文表記はSophia H.Chen。義和団事変賠償金奨学生の最初の女子学生の一人として米国ヴァッサー大学にて英文学を、後シカゴ大学院で歴史学をお

さめ修士号取得。留学に至るまでの半生は、一九三五年に北京にて Chen Nan-Hua の署名で刊行した *Autobiography of A Chinese Young Girl*（中国語訳は『陳衡哲早期自伝』馮進訳、安徽教育出版社、二〇〇六）にて詳細に語られている。一九一七年、胡適が、白話を提唱した際、女子学生の寮生活を会話体でつづった白話小説「一日」を発表し、白話運動を支持する。一九二〇年帰国後、北京大学で女性として初めて教授（西洋史）に迎えられる。同じくアメリカ留学生であった任鴻雋と結婚し、出産を機に教授職を辞し、以後文筆活動に入る。一九二七年第二回太平洋問題調査会（IPR）に出席、以後一九三三年の第五回大会まで毎回出席し、第三回は中国支部の幹事として英文論文集の編集にあたっている。この論文集の邦訳、石田幹之助監訳『支那文化論叢』（生活社、一九四二）では、竹内好が朱經農「教育」と曽寶蓀「支那の婦人」を訳している。女性問題、教育問題を中心に果敢に発言し、夫任鴻雋が四川大学長として赴任した四川では、地元の体制及び人々の思想の保守性を厳しく批判したことで騒ぎとなり、四川を去り北京（北平）に戻ることになる。その後日本軍の侵略を避け、上海、廬山、香港と各地を転々とする。その後長女の任以都（一九二一―　歴史学者・中国近代社会経済史専門。彼女が北京で通った培華女学校は林徽因が学んでいる。参照「林徽因と培華女学校」『近代中国　その表象と現実』（平凡社、二〇一六）が西南連合大学に入学し、任鴻雋も中央研究院の総幹事に任命されたことで家族で昆明に移る。その後長女以都をヴァッサー女子大に留学させるため香港経由で米国に送り出し、次女（以書一九二三―一九九？）と長男（以安一九二八―二〇一四、地質学者）を香港の学校に入学させたところで、真珠湾攻撃に遭遇する。この時の香港での生々しい体験記録をヴァッサー大学に送っている。（以下参照。Sophia Chen Zen, “I saw War in Hongkong”, Vassar Quarterly, Vol.XXX, No.5 (April 5, 1944), pp.4-8. 邦訳は「『彼女たちのことば』陳衡哲　その3」）一九四六年、中華教育基金の事務処理のために任鴻雋がアメリカ・ワシントンに招聘されるに伴い二人の子供とでアメリカに赴き、任鴻雋の招聘期間が終わると子供たちは米国に残し、一九四七年中国に戻り、夫婦で上海に定住することに決める。楊絳のこの回想の始まりで「上海に移って」というのはこの時のことを指す。中華人民共和国成立以降は、上海市政治協商委員に選出されるなどするが、目を患い、ほぼ蟄居状態のまま文革中の一九七六年に没する。著作に『雨点』『陳衡哲散文集』高等中学教科書『西洋史』等。陳衡哲について詳細は以下を参照。「『彼女たち』の近代、『彼女たち』のことば　陳衡哲」『慶應義塾大学日吉紀要　中国研究』第三号（二〇一〇年三月）、第四号（二〇一一年三月）、第七号（二〇一四年三

月）「『陳衡哲著訳目録』付解題および史料補遺」『慶應義塾大学日吉紀要　中国研究』第八号（二〇一五年三月）。

（4）任鴻雋（一八八六―一九六一）字は叔永、四川塾江県出身。科挙では秀才となる。重慶で教師を務めた後一九〇九―一一年高等工業学校にて応用化学を学び、辛亥革命直前に帰国、一九一二年臨時総統府で孫文の秘書を務める。天津『民意報』の編集長を務め、一九一三年米国留学、コーネル大学にて化学と物理学をおさめた後、コロンビア大学に移り修士号取得。米国留学中に「中国科学社」を設立し、月刊『科学』を創刊、帰国後留学生仲間であった陳衡哲と結婚、北京大学化学系にて教授、「教育部専門教育司長。後上海商務印書館編集者、国立東南大学（南京大学前身）にて副校長、後中華教育文化基金理事会理事等を経て一九三五年より二年間、国立四川大学校長となる。のち中央研究院化学研究所所長、中華教育文化基金理事会理事等を歴任、中国科学工作者協会を設立、理事となる。一九四六年、中国科学社、中華教育文化基金董事会を上海に移した後、この基金会の業務でアメリカ側と折衝するためにワシントンへ一家で渡り、翌年上海に戻る。上海に中華人民共和国成立以降上海科学図書館館長、上海図書館館長、上海市科学技術協会副主席を歴任。一九六一年上海にて病没。著作集『科学救国之夢・任鴻雋文存』（任鴻雋著、樊洪業、張久春編集、上海科学教育出版社、二〇〇二）。

（5）儲安平（一九〇九―一九六六）江蘇省宜興の人。評論家、編集者。上海光華大学（華東師範大学の前身）英文系卒。一九三三年より南京『中央日報』文芸・学術欄の副編集。一九三六―一九三八年、英国ロンドン大学に留学。第二次世界大戦勃発で帰国、『中央日報』の執筆県編集に携わり、同時に上海復旦大学教授、中央政治学院研究員などを兼任。後、重慶にて『客観』を創刊、一九四六年上海にて『観察』半月刊を創刊、社長兼主筆となる。楊絳は儲安平から請われてゴールドスミスの散文「世界公民」から一部を訳し、題名を「髄鉄大少回家」として『観察』に発表している。同時に復旦大学教授を兼任し、比較憲法、政治学などの過程を開設。中華人民共和国成立以降、新華書店副総経理、出版総署発行局副局長等を歴任。一九五四年、九三学社（科学技術専門家よりなる中国民主諸党派の一つ）宣伝部副部長となり、第一期全国人民代表大会代表に選出される。一九五七年『光明日報』編集長に就任。一九五七年『光明日報』に発表した『毛主席及び周恩来総理に向けてのいくつかの意見』が毛沢東を激怒させ、それにより「ブルジョワ階級右派分子」とされ、文化大革命初期に迫害死する。今日でも死因は不明、遺体も行方知れず、名誉回復

もなされていない。光明日報編集長就任からその死まで、章詒和著『最後的貴族』（香港 Oxford University Press, 二〇〇四年：邦訳『嵐を生きた中国知識人「右派」章伯鈞をめぐる人々』）の第二章に詳細に紹介されている。この注も主にこの著作での紹介を基にしている。

（6）一九三三年国民政府によって創設される。一九五二年、一九二七年に、江南図書館を引き継いだ国立中央大学国学図書館と合併し、南京図書館となる。銭鍾書は、一九四六年六月から一九四八年六月まで国立中央図書館英文館刊行の英文漢学季刊『書林季刊』（Philobiblon）の編集長を務め、多数の論文もこの雑誌に発表している。

（7）上海の住まい。当時無錫から上海に避難してきていた銭鍾書の家族は辣斐德路609号（現在の復興中路573号）に、蘇州から避難してきた楊絳の家族はそこから徒歩で十分ほど離れた蒲石路の一画に住み、夫婦は基本的には楊絳の家族の方に身を寄せていた。銭鍾書の長編小説『囲城』が書かれたのもこの住まいである。

（8）車夫が自転車で引く「りんタク」のこと。

（9）王雲五（一八八八―一九七九）祖籍は広東省香山県の人。上海生まれ、岫廬は号。一九二一年胡適の推薦で商務印書館編訳所長となる。一九三〇年、商務印書館総経理。「四角号碼検字法」を創出。『百科小叢書』『万有文庫』『中国文化史叢書』『大学叢書』等大型の叢書刊行等、各種出版事業に貢献する。一九四〇年代後半、国民政府財政部部長として経済立て直しを図るが失敗し辞職。一九四二年二月香港に赴いた後台湾に移る。国立故宮博物館理事長、台湾政治大学政治研究所教授などを歴任。台北市にて病没。

（10）劉大傑（一九〇四―一九七七）湖南省岳陽県生まれ。作家、翻訳家。早稲田大学留学。安徽大学、四川大学などで教鞭をとる。暨南大學文学院院長、復旦大学教授兼中文系主任、中国作家協会上海分会副主席、第四期全国人民代表大会代表、第四期政治協商会全国委員会委員等を歴任。『収穫』『文学評論』『上海文學』等の雑誌編集員、全国高等学校中文系「中国文学史」教学大綱の制定に参与。『辞海』等編集。著作に『中国文学批評史』『中国文学発展史』等。上海にて病没。

（11）沈亦雲（一八九四―一九七一）。浙江嘉興の人。名前は性真、または景英。天津北洋女子師範学堂で学んだ後、蘇州景海女学似て英語を学ぶ。辛亥革命勃発時に仲間と上海北伐女子敢死隊を結成する。そこで滬軍都督府参謀長であった黄郛（一八八〇―一九三六）と知り合い結婚する。中華人民共和公成立後はアメリカにわたり、ニューヨークにて

没する。著書に『亦雲回憶』（口述記録）がある。文章で言及される妹とは、二番目の妹、性仁（一八九五―一九四）：社会学者陶孟和（一八八七―一九六〇）夫人。翻訳家）のことか？

(12) 楊景任（一八九八？―一九？？）。張奚若（一八八九―一九七三）が上海にて同郷の楊西堂と知り合った際、楊西堂が張渓若の才能を見込んで娘を嫁がせたという。

(13) 『紅楼夢』一〇九回「芳魂を放ちて五児錯愛を承くるのこと」宝玉が付き人としてきた丫鬟の五児に、以前風邪をひき亡くなった晴雯の面影を見て、思わずその手を取った場面を指す。

(14) 前身は南京に華僑の学生受け入れの教育機関として設立された暨南学堂。その後幾たびかの変遷を経て一九一八年、上海にて国立暨南大学として発足。当時唯一の華僑受け入れ大学となる。日中戦争勃発で上海の共同租界地に移転、その後太平洋戦争勃発で福建に移転。一九四六年再び上海に戻る。銭鍾書が教壇に立ったのはこの時期である。一九四九年五月共産党側が上海を支配下におさめ大学接収を行い、それぞれ学部によって復旦大学、交通大学、南京大学へと改組される。一九五八年広州にて再建。現在は華僑高等学府として国内外に分校を持つ重点大学となっている。

(15) 『英国文化叢書』全十二冊、商務印書館、一九四八年。この叢書の出版企画は、英国駐華使館の責任の下に、英国文化委員会が第二次世界大戦後、英国の文化を紹介するために立ち上げたもので、叢書の出版のために「英国文化叢書委員会」が設けられ、朱経農、林超、銭鍾書、蕭乾及び二人の英国人、G.Hedley. H.McAleavy で構成されている。社会科学、文学、美術、経済、教育など主に人文学分野から十二冊の書籍を選び、十二人の翻訳者が一冊を担当している。十二冊の内訳は以下の通り：章元善訳『英国合作運動』（E.Topham and J.A.Hough. *The Co-operative Movement in Britain.*）、楊絳訳『一九三九年以来英国散文作品』（J.Hayward. *Prose Literature Since 1939.*）、任鴻雋訳『現代科学発明談』（Sir William Bragg and others. *Science, Lifts the Veil.*）、張芝聯訳『英国大学』（Sir E. Barker. *British Universities.*）、傅雷訳『英国絵画』（E.Newton. *British Paintings.*）、邵洵美訳『一九三九年以来英国詩』（S.Spender. *Poetry Since 1939.*）、林超訳『英国土地及其利用』（L.Dudley Stamp. *The Land of Britain and How It Is.*）、李国鼎訳『英国工業』（G.C.Allen. *British Industry.*）、全増嘏訳『一九三九年以来英国小説』（Henry Reed. *The Novel Since 1939.*）、張駿祥訳『一九三九年以来英国電影』（Dilys Powell. *Films Since 1939.*）、蔣復璁訳

『英国図書館』（L.R.McColvin and J.Revie. *British Libraries.*）、王承緒訳『英国教育』（H.C.Dent. *British Education.*）。以上参考：謝泳『銭鍾書交游考』（九州出版社、二〇一九年）他。

（16）蒲石路（Rue Bourgeat）現在の上海市長楽路、一九一四年から一九四三年までの呼び名。かつてのフランス租界だった。蒲園は長楽路五七〇弄に位置する十二棟からなる洋館のアパート。

（17）貝当公寓（Petain Apartments）。以前の貝当路、現在の徐滙区衡山路七〇〇号にある七階建て、モダニズム建築のアパート。一九三四年に建造。二〇〇五年上海市優秀歴史建造物に指定されている。

（18）民国期中国江南地区における唯一のカトリック系女子大学。文学院と理学院を併せ持った。一九三七年、上海フランス租界の中心地区蒲石路一八一号（現在の長楽路向明中学及び滙海中路上海科学院所在地）に校舎建立。組織上は震旦大学所属で震旦大学校長胡文耀と常務理事は米国人（才爾孟）が兼任、実務は聖心会修道女院長が管理。一九五一年震旦大学に編入、女子大学は廃止される。震旦大学は翌年全国高等院校院系改組の際に復旦大学、交通大学、等に組み入れられる。震旦女子文理学院女子中学部は震旦大学付属中学と合併し向明中学となり現在に至る。楊絳の父親楊蔭杭が一九四〇年九月より震旦女子文理学院で『詩教』を教えていたが、翌年夏、上海に立ち寄り太平洋戦争勃発でそれまで教えていた湖南藍田学院に戻れなくなった銭鍾書に譲り、以降一九四五年六月まで銭鍾書はこの大学で英語を担当。一九四六年銭鍾書が岐南大学教授となった際、楊絳が授業を引き継いでいた。尚、この大学には楊絳の一番下の妹楊必（一九二二―一九六八）。サッカレー『虚栄の市』中国語題名『名利場』を翻訳）が英文系で学んでいる。

（19）楊絳の父楊蔭杭（一八七八―一九四五）については楊絳のエッセイ「回憶我的父親」（一九八三：邦訳「父の回想」中島みどり訳『幹校六記』みすず書房、一九八五）に詳しいが、その死に状況について二〇〇一年に「難忘的一天」と題した文章を書き、愛する父の死に目に会えなかった悲痛な思いを描いている。

（20）清代、厲鶚の編纂。全百巻。宋代詩人三千八百十二人の思惟か及び関連資料を収集したもの。楊絳一家はその後一九四九年に北京、清華大学に移り、銭鍾書は毛沢東選集英文訳編集委員としての任務を終えた後、宋詩選註（一九五八年刊行）作業に従事することになる。

（21）日中戦争時期、貴重な書物、典籍の散逸を防ぐために、当時浙江興行銀行董事長だった葉景葵や上海商務印書館董

事長の張元済らが燕京図書館中文采訪部主任の顧延龍を総編集として招き、一九三九年創設した私立図書館。一九四九年、上海市に寄贈となり、上海歴史文献図書館となる。一九五八年、上海図書館に合併される。

(22) 原文「一騎紅塵妃子笑」唐、杜牧の「過華清宮絶句」の後半より引用。詩ではこの句の後に「無人知是荔枝来」と続く。大意は「砂ぼこりを巻き上げて馳せ参じる一騎を見て楊貴妃がにっこり微笑むのは、好物の新鮮な荔枝が届いたからだと知るものがどれだけいるだろうか」。ここでは鍾書が楊絳のことを「新鮮な鶏包子を届けに土ぼこりを蹴立てては馳せ参じる」とからかったわけである。

(23) 蔣恩鈿（一九〇八―一九七五）江蘇省太倉市生まれ。父親は小学校教員。母を十一歳でなくすが、継母の支援を得て蘇州新華女中で学ぶ。ここで楊絳と知り合い、以後二人は生涯の友となる。新華女中を卒業後、清華大学外文系（西洋文学）に進み、銭鍾書、曹禺、謝氷心、呉晗、その妻となる袁震らと知り合う。清華大卒業後に師範大学などで教鞭をとったあと大学に戻り、助教と学監を務める。一九三七年、清華大学時代に知り合った陳謙受（経済学専門）と結婚する。中華人民共和国成立以降、華僑の学者からバラ四百株を譲り受けたことからその栽培と研究に従事し、園芸研究家として貢献する。一九七五年、医療事故で死亡。楊絳は蘇州東呉大学から清華大学院に移るとき、入学申請から宿舎の手配までこの友に助けられる。楊絳の回想録には彼女が何回か登場する。

(24) 胡適がアメリカ留学前までの半生をつづった自伝。一九三〇年六月に執筆開始、『新月』雑誌第三巻第一号（一九三一年三月）から第三巻三、四、七、十号、第四巻第四号（一九三二年一一月一〇日）に計六篇が掲載される。のち上海亜東図書館より一冊にまとめられ一九三三年九月に単行本として刊行される。吉川幸次郎による邦訳（創元支那叢書、一九四〇）がある。

(25) 楊志洵（?―?）字は景蘇、江蘇無錫の人。長年商務印書館に在職すると同時に中国公学でも教える。胡適の自伝『四十自述』では「その学術思想と教えに生涯にわたり恩恵を受けた」とある。楊絳は最晩年のエッセイ（二〇一三）「憶孩時―三姊姊是我〝人生的啓蒙老師〟」でもこの人物に言及し、「族叔」（曾祖父の兄弟の孫で父親より年下の親族）であり、「胡適氏の先生である。胡適氏は『この先生を知ってから勉学に励むようになった』と胡適の言を引き、楊景蘇が父とよく一緒にいたこと、父とは友人でもあり同時に家族の一員のようでもあったと述べている。

(26) 陳衡哲が過去雑誌等に発表した十編の短編からなる小説集。当時上海望平街（今日の山東路）一六一号にあった新月書店から一九二七年四月刊行。書名にも取られた「小雨点」は雨粒の小冒険を描いた童話。また、おさめられた作品のうち、ヴァッサー大学での寄宿舎生活の体験をもとに、女子学生の一日を口語会話を中心に口語体でつづった小説『一日』は一九一七年五月『留美学生季報』に発表された中国における早期白話体小説。魯迅の「狂人日記」より少し早い発表となる。

(27) 実はこれは胡適の言。胡適『留学日記㈣』（胡適紀念館授権遠流出版公司、一九八六年、一三五頁）一九一六年十一月一日付に「寄陳衡哲女士」として以下の詩を送ったとある。你如「先生」我／我也「先生」你。／不如兩免免了／省得多少事（私を「先生」とお呼びになるなら、私もあなたを「先生」とお呼びします。いっそ互いにやめてしまいましょう、面倒は省きましょうよ）。これは、ひと月前発行の『留美学生季報』十月号に陳衡哲が寄稿した二編の詩に任鴻雋と胡適が感心して三者間で手紙のやり取りが始まった時、陳衡哲が胡適を「先生」と呼んだことに対する答えを日記に記したもの。この後は、胡適が続く十一月三日の日記に「再答陳女士」と題して「陳女史が返信としてこのように言ってきた、と以下のように陳衡哲の返信を記している。所謂「先生」者，「密斯忒」云也。／不稱你「先生」，又稱你什麼？／不過若照了，名從主人理／我亦不應該／勉强「先生」你。但我亦不該，就呼你大名。／「還請寄信人，下次寄信時，申明」要何稱（いわゆる「先生」とは「ミスター」のこと。あなたを「先生」とお呼びしないわけにはいかないでしょう？　ただ考えてみたら、命名は主人に従う理から言って、無理やり「先生」とお呼びすべきではありませんね。で、「お手紙の主にお願いしたいのですが、この次手紙をお送りくださるときは、どうお呼びしたらよいか明示して」くださいませ）。日記にはひき続きこの手紙への胡適の返信が書かれている。尚、陳衡哲夫婦と胡適の関係については以下の文章がよくまとまっている。陳平原「那些讓人永遠感懐的風雅――任鴻雋，陳衡哲以及〝我的朋友胡適之〟」（『書城』二〇〇八年第四期）。

(28) 『称心如意』（世界出版社、一九四四）と『弄真成假』（世界出版社、一九四五）を指す。

(29) 胡適の博士論文「中国古代哲学方法之進化史」を基に一九一七年北京大学で行った中国哲学史講義録を整理・編集したもの。一九二二年二月、上海商務印書館より刊行。二か月にして再版となるほど読まれたという。

(30) 楊絳が通った高校（〝高中〟）は蘇州の振華女学校。大学（学部）は東呉大学。

(31) 二人の叔母とは楊絳の父、楊蔭杭の二人の妹、楊蔭枌と楊蔭榆を指す。二人とも婚家を出ており、楊絳の父が経済的支援をしていた。楊絳「回億我的姑母」によると、楊蔭枌の夫だった裘剣岑はマコーレイ「ジョンソン伝」を訳しているとのこと。楊蔭榆（一八八四―一九三八）は「女師大事件」の当事者、北京女子師範大学校長。その後職を辞し蘇州に戻り教育活動に従事。一九三八年、女性たちへの暴行への抗議をしたことで日本軍からにらまれ、一九三八年日本兵に銃殺された。

(32) 誰を指すのか不詳。

(33) 顧延龍（一九〇四―一九八八）蘇州生まれ、文献学者、書家。起潜は字。一九三九年上海合同図書館総幹事となる。のち暨南大学、光華大学教授を兼任。一九四九年以降、上海文献図書館長、続く上海図書館長を務め、同時に華東師範大学教授を兼任。文化部国家文物鑑定委員会委員を務める。

(34) 羅家倫（一八九七―一九六九）教育家、歴史学者。一九二〇年米国留学後、欧州に遊学し歴史学及び国際関係を学ぶ。帰国後北伐に参加。一九二八年、清華学堂から改名した国立清華大学の初代学長、一九三二年国立中央大学学長を歴任。一九四七年国民政府により駐印特命全権大使を任ぜられる。一九五〇年インドから台湾にわたり、中華民国総統府国策顧問、国民党中央評議委員、国史館館長等の職を兼任、歴任する。台北にて没す。

(35) 林同済（一九〇六―一九八〇）福建省福州出身。哲学者。一九二六年清華大学卒業後、ミシガン大学留学、後カルフォルニア大学バークレー校にて政治学博士取得。一九三四年帰国後、天津南開大学政治学教授、日中戦争時期は雲南大学文学院院長、復旦大学政治学教授を歴任。『戦国策』雑誌を刊行、いわゆる「戦国策派」グループの代表の一人とされる。一九五八年右派とされ迫害を受ける。一九七九年名誉回復。一九八〇年、学術講演で米国に招かれた際、心臓発作で倒れ、カルフォルニアにて没す。

(36) チトー（一八九二―一九八〇）ユーゴスラビアの政治家。

(37) 毛沢東を指す。参考：「陳凱「毛沢東寄給胡適的明信片」『人民政協報』（二〇一二年六月十二日」。谢泳「毛泽东是不是胡适的学生」http://www.aisixiang.com/data/13934.html

(38) 呉学昭『聴楊絳談往事』（三連書店、二〇〇八）によると楊絳・銭鍾書夫婦は、オーウェルの作品は全て原文で読ん

でいたという。

(39) 楊絳の父、楊蔭杭（一八七八―一九四五）の筆名。

(40) 原文「不足為外人道」。『桃花源記』他言無用の意。

(41) 鄭振鐸（一八九八―一九五八）福建長楽人、浙江温州生まれ。文学史家。字は西諦。

(42) 唐徳剛（一九二〇―二〇〇九）安徽省合肥生まれ。歴史学者、伝記作家。国立中央大学にて歴史学専攻、一九四八年アメリカ留学。コロンビア大学東アジア図書館長、後ニューヨーク市立大学教授など歴任。『張学良口述史』『胡適口述史』『顧維鈞回億録』その他多数の口述史を書き記す。カルフォルニアに没する。

(43) 初版は一九五八年九月、人民文学出版社より刊行。その後、銭鍾書本人により何度か校訂がなされている。邦訳は『宋詩選註』（全四冊、宋代詩文研究会訳注、平凡社東洋文庫、二〇〇四）。第一巻巻頭の「日本語版序」で王水照氏が「小川環樹先生は『宋代文学史は本書の出現によって、多くの部分が書き改められなければならないであろう』と述べておられる（京都大学『中国文学報』第一〇冊、一九五九）が、これはとても重みのある評語である」と述べている。小川環樹氏のこの評価によって批判がエスカレートしていくのが食い止められたという。『聴楊絳談往事』二八四頁（前掲注38）では、『宋詩選註』が出版されて間もなく、銭鍾書は資産階級の視点があると批判されたが、銭鍾書は当時『毛沢東選集』の英訳のために市の中心地区に出向かねばならず、批判大会はいつも欠席裁判となったこと、指導部は楊絳に代理出席を求め、彼女が皆の批判を逐一ノートに記録し鍾書の代わりに批判の言葉を浴びたことが説明され、『その後日本漢学の泰斗、小川環樹先生の前述の評価が伝わり、たちまち批判が終息した』とある。

(44) 『我们仨』に、当時楊絳が体調を崩し、銭鍾書が大変心配したことが書かれている。

(45) 李石曾（一八八一―一九七三）名は煜瀛、石曾は字。清末にフランス留学し、菜食主義を提唱し、一九一九年パリ近郊に豆腐工場を創設する（参照『初期中国共産党群像―トロツキスト鄭超麟回憶録』鄭超麟著、長堀祐造・三好仲清・緒形康訳、平凡社、二〇〇三）。呉稚暉らと無政府主義の雑誌『新世紀』を創刊。「留仏勤工倹学会」を組織する。のち北京大学教授、北平大学校長となる。国民党内では右派、蔣介石に協力、台北に没す。

(46) 「奥様は口が寂しく」の原文は「嘴里淡出鳥来」『水滸伝』第三回、出家した魯智深が肉が食べたくて言った言葉。三か月も肉の味を知らず、淡（すなわち）蛋（卵）も孵化して鳥になってしまう、の意味から。

(47) 一九五一年十一月に始まった、共産党幹部主導による、党員幹部の汚職、浪費、官僚主義に反対する大衆運動。すぐ後に五反運動（ブルジョワ階級の贈賄、脱税、国家資材の横領、手抜き仕事と材料のごまかし、国家経済情報の窃取という「五毒」に反対する）が続き、一九五二年八月まで続けられた。官僚の汚職不敗と資本家の不法行為とを批判・摘発する政治運動だったが、結果的に民族資本や私営工商業に大きな打撃を与え、以後の社会主義化を決定づけるものとなった。

(48) 一九五二年高等教育機関が再編成され、清華大学は文、法、理、農の四学院を北京大学に移し、建築、土木、水利、機械製造、動力機械、電機の六科学を持つ工業大学に転換。北京大学は、工学院を清華大学に移し、燕京大学の文、法、理科の学科などを合併し、文理両科の総合大学となる。ここでの「三校」とは清華大学、北京大学、燕京大学を指すと思われる。

(49) 竺可楨（一八九〇―一九七四）浙江省紹興県生まれ。気象学者、地理学者。

(50) 現在著作として刊行されているのは『科学救国之夢』（前掲注4）。このほか夫婦の書信集として『任鴻雋、陳衡哲家書』（搶救民間家書項目組委員会編、商務印書館、二〇〇七）が刊行されている。

(51) 夏鼐（一九一〇―一九八五）中国の考古学者。浙江省温州生まれ。清華大学歴史系卒業後、英国留学、ロンドン大学で考古学を学ぶ。中国社会科学院副院長を経て一九六六年中国社会科学院考古研究所所長となる。多数の重要な発掘を行い、中西文化交流、経済史、科学史の分野に貢献する。『中国考古学研究』『中国文明の起源』等邦訳が出ている。

(52) 楊絳と銭鍾書夫婦が幹部学校から北京の自宅に戻った時、「革命的大衆を資産階級権威の住居に住まわせる」措置のもとに別の家族と同居せざるを得なくなるが、この家族の横暴さに耐えかねて家を出て娘、銭瑗の宿舎に間借りなどして過ごしたことを指す。この経緯については「回憶：我与鍾書―従〝摻沙子〟到〝流亡〟」（『南方週末』（一九九九年十一月十九日）、のち「従〝摻沙子〟到〝流亡〟」の題名で『従丙午到〝流亡〟』中国青年出版社、二〇〇〇年一月、所収）に詳しく述べられている。客観的な描写でほのかなユーモアも漂わせる体験記だったが、その後相手方からの反論など論議を呼んだ。『楊絳全集』（全九巻、人民文学出版社、二〇一四年八月）には収録されていない。